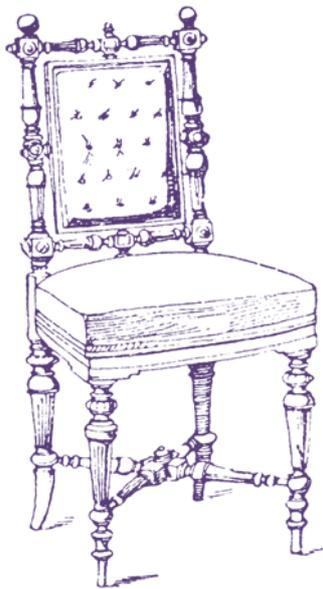


第十三号室



—Number 13—

ユトランドの町々のうちで、ヴァイボルグは、まさしく高い地位を占めている。この町は僧正管区に属していて、優美だが大部分まったく新築の大伽藍、たのしい遊園、雄大な湖水、それから鶴さむらいの園おん。その近くにデンマーク中でもっとも美しい町の一つに数えられるハルドがある。そしてそのまたつい近くに、フィンデラップがある。こゝは、一二八六年、聖チエチリアの祭日に、マルスク・ステイツグが、エリック・グリッピング王を弑したところだ。十七世紀になって、エリックの墓が発掘されたが、その頭蓋骨には、角な先の鉄鎚メイスで打った痕跡が、五十六もあったという。―だが私は、案内記を書いているのではない。

ヴァイボルグには、いいホテルがある。プライスラー・ホテルと、

フェニックス
不死鳥ホテルが好ましい。だが今にその経歴をお話する私の甥は、はじめヴァイボルグを訪れた時、コールツン・ライオン金獅子ホテルへ泊った。爾来彼は二度とそこへ行ったことはなかった。これからさきのページは、たぶん彼が行かない理由の説明になるだろう。

金獅子ホテルは、一七二六年の大火で、災厄を蒙らなかつたごく少数の建物の中の一つである。あの大火では、ソグネキルケ寺だとか、ラードフース寺だとか、そのほか古くて興味ある多くの建物が、実際灰炉に帰してしまった。

金獅子ホテルは、大きな赤練瓦造りの旅館である。正面は総練瓦で、破風にコルビー・ステツプス葺段をつけ、戸口の上にはテキスト聖句を書き込んである。だが、馬車を乗り入れる中庭の地びたは、木片と漆喰を用いて、黒白のケージ・ワーク「籠目」でできていた。

私の甥が戸口へ登って行った時は、太陽が西空に傾きかけつつも、

堂々たる旅館の正面へ、残りの光をいっぱいにぶつつけていた。彼はこの場所の古風な様子をよろこんだ。旧式のユトランドの、こんな典型的な宿だもの、十分満足な楽しみな逗留ができるわいと見込みをつけた。

このアンダーソン（甥の名）が、ヴァイボルグへ来たのは、普通の意味でいう用向のためではなかった。彼は、デンマーク教会史の研究に身を委ねていた。そしてヴァイボルグのリグサルキーフ寺には、あの火災からまぬがれて、デンマークに於けるカトリック教の最後の日に関する書類があることを知っていた。だから、彼はかなりな時日―たぶん二週間たつぷりか三週間で、そうした書類の調査と筆写に費やそうと思った。で、彼は、金獅子ホテルが、寝室にも研究室にも使えるような、適当な大きさの部屋を、提供してくれるようにと希望した。この希望を旅館の主人に話すと、主人はだいぶ考えた後、あなたが大

きな部屋を一つ二つ検分して、御自分でおきめなさるが、なによりの方法でしようと、ほのめかした。たしかにそれがいい思いつきらしかった。

最上階は、一日の仕事のあと、あまり多く階段をのぼることになるからというので、拒まれた。三階には、ほしいというほどの広さをもった部屋がなかった。しかし二階には、大きさという限りでは、結構注文通りのいい部屋が、二つ三つあった。

主人は、十七号室を、ひどくもちあげた。だが、アンダーソンは、その窓が隣りの建物の白壁ばかりに面していること、だから午後は部屋が暗くなることを指摘した。十二号室と十四号室は、どちらもずつとよかった。というのは、二つとも街路を見おろし、騒音のおまけが加わるにしても、輝やかな落日、美しい眺望は、それを償うて余りありだったから。

とうとう十二号室が選ばれた。その両側の隣室と同じに、この部屋は一方にばかり三つ窓がついていた。窓はずいぶん高く、幅も異常に広がった。^{ファイヤブレース}壁炉はなかったが、みごとな、やや古い、鑄物のストーヴがあつて、その同じ側に、アブラハムがその子イサクを生贄^{いけにえ}にしている絵が懸けられ、絵の上方には、“— Bog Mose, Cap. 22.” という題銘が書き入れられていた。ほかに部屋の中で、目だつものはなにもなかったが、この唯一の興味ある絵は、この町でつくられた古い色ずり版画で、時代は一八二〇年頃のもの。

夕食の時間が近づいた。いつもの沐浴^{ゆあみ}をして元気づいたアンダーソンは、階段を降りて行ったが、その時はまだ、食事の合図のベルが鳴る二三分前だった。彼はこのわずかな時間を、宿泊人名表を調べることにあてた。デンマークの常習では、宿泊人の名は、大きな黒板に掲示されるのだった。その黒板には縦横の線が引かれ、横線のはじめ

には各部屋の番号が書きこまれていた。表にはべつに変わったこともなかった。一名のドイツ人の弁護士と、コッペンハーゲンから来た、数名の旅商人の名があるだけだった。ただ一つだけ気がかりの種ともなった点は、部屋へケチをつけられるため、十三という番号が、とり除かれていくということだった。アンダーソンは、デンマークのいろいろなホテルで経験して、すでに何度かこのことに心づいていた。ところで彼は、この特殊の番号へ向けて、文句をいうことが、たとえ通例だということにしても、どうしてそんなに広く根強くひろがり、そうした札をかけた部屋を貸すことを、困難にしているのかというわけを、怪しまずにはいられなかった。で、彼は、旅館の主人に、一体あなたや同業者達が、十三号室にはいることを断わる沢山の客に、実際出くわしたことがあるのですかどうですかと、訊いてみようと思った。

夕食の時、どんなことがあったか、それについては、アンダーソンは、

なにも私に語っていない。そして夜は、着物や本や書類の荷をほどこたり整理をするだけに過して、更にこれということもなかった。

十一時頃、彼は床に就こうと思った。しかし彼には、今日多くの人がやるように、眠りに入るため、印刷物を二三ページ読むことが、まったく必要な予備工作だった。で、今彼は、汽車の中で読みさしておきたい本を思い出した。その本はその時読むには、なによりもつて来いのもので、食堂のそとの懸け釘にかけておいた外套のポケットに入れてあった。

すぐ駆け降りて取って来た。廊下はすこしも暗くなかったのも、もどって自分の部屋を見つけることも、面倒ではないと、まあ、そう思った。だが、部屋のドアへもどって、ドアの把手をまわしたら、ドアはまったく堅く閉じて開かなかった。しかし彼は、うちらから、なにかドアの方へ、急に動いて来る物音を聞いた。無論彼は、そのドアが、

間違っているかどうか調べた。自分の部屋はその右なのか左なのか？
彼はドアの番号を見た。それは第十三号室だった。

では、彼の部屋は左のはずである。果してそうだった。そこで彼は
ベッドにはいり、五六分、なじみの三四ページを読み、灯火あかりを消し、
眠りに就こうと寝返りしたが、その時ふと、ホテルの黒板には、第
十三号室なんてものは書いてなかったのに、今、たしかにその番号の
部屋があつたことを思い浮かべた。彼はむしろ、その部屋を自分の部
屋にしなかつたのは、残念だつたと思つた。その部屋を占領すれば、
自分はこの旅館の主人に、ちよつと役に立つたかも知れないのだ。一
個の素性正しいイギリス紳士が、三週間もその第十三号室に住み、し
かもその部屋が大いに気に入つたという言い草を、主人に与えること
ができたかも知れないのだ。だが、その部屋は、たぶん下男部屋か、
或はそうした種類の部屋として使われているのらしく、結局その部屋

は、彼の部屋としては大きくもなく、いい部屋でもなさそうだった。

そうして彼は、街路の灯火で半ばあかるく、かなりに物腰のわかる自分の部屋を、ねむたげに見まわした。おかしな様子だと、彼は思った。部屋というものは、薄暗い光では、あかるい光の時よりも、たいていは大きく見える。だがこの時は、幅がせばまり、高さが不釣合いに伸びあがったように見えた。まあ、まあ！こんなとりとめもない妄想よりも、眠りが大事だ。―で、彼は眠りに落ちた。

到着の翌日、アンダーソンは、ヴァイボルグのリグサルキーフ寺を目ざして出かけた。彼は、デンマークでは例外でもあるように、快く迎えられ、なんでも見たいと思うものへ近寄る許可を、容易に与えられた。

彼の前に並らべられた文書類は、まったく予期以上に、ずっと数も夥しく、しかも興味のあるものだった。公文書類のほか、ヨエルゼン・

フリース僧正の書翰一束があつた。この人は僧正職に在つた最後の羅馬教徒で、これらの書翰は、この人の私生活や個性を知る上に、はなはだおもしろい、且つ「親身しんみな」詳叙とも呼ばれるべきものを、収めているのだつた。そのなかには、僧正がこの町で、住んでいたのではないが所有していた一軒の家について、多くの話が書かれていた。その借家人は、見かけはやや、矯正会に対して誹謗を放つたり、邪魔をしたりする人物らしかつた。書翰によると、彼は町の恥であつた。彼は秘密な邪悪な術をおこなつた。悪魔に魂を売つた。かような毒蛇とも吸血魔ともいふべき人物に、僧正が家を貸して保護するなんていうことは、羅馬教会の大きな腐敗迷妄も同感であつた。僧正は大胆に、これらの非難に立ち向つた。僧正はそのような秘法といつたものは、自分もすべて唾棄するのだと断言した。そして非難する人々に、この問題を正規の法廷へ―無論、宗教上の法廷へ―持ち出して、徹底的に究

明してもらおうと要求した。もしこの非公式に断定された罪悪のどれかでも、有罪だという証拠があるなら、僧正は、誰よりも、いちはやく進んで、ニコラス・フランケン博士（借家人の名）の罪悪を断じたにちがいがなかった。

アンダーソンは、ついで新教派の長老ラスムス・ニールゼンの書翰に手をつけたが、ほんの一瞥する暇しかなかった。で、記録所がその日閉鎖される前、その大意だけを蒐集した。この大意は、キリスト教徒が、今はもはや羅馬の僧正達の決定によって、束縛されていないなかったこと、そして、僧正の法廷は、そうした重大問題を裁断するような、適切な、権能ある裁判所ではなかったし、あり得なかった旨のものであった。

アンダーソンは、記録所を辞去した時、一人の老紳士といっしょになった。この老紳士は、記録所を主宰している人だったので、あるい

て行くうちに話は自然、いまいった文書類に向けられた。

このヴァイボルグの記録アーキヴァイスト保管人であるスカヴェニアス氏は、管理している記録類一般に関しては、なかなかよく知っていたが、改革時代「十六世紀の宗教改革」の記録には、専門家でなかった。で、その記録について、アンダーソンが語ったことには、いかにも興味をもった。彼は、アンダーソンが話した内容をまとめて、出版される日を、鶴首して待つと言った。

『例のフリース僧正が所有した家ですがね。』と、彼は言葉をつづけた。『その家が、どこに建っていたか、私には大変な難問なのですよ。私はずいぶん注意して、古代ヴァイボルグの地誌を研究したのですが、実に悲しむべきことには―僧正の所領だったという土地の記録がなくなっているのです。それは一五六〇年に作製されたもので、この町の財産目録が記入してあり、大部分アルキーフ寺に保管されてい

たのです。いや、まあいいです。いつかは私は、フリース僧正の事蹟を探り出して見せますよ。』

それからなにか散歩をしたあとで―私は、彼がどうして、どこでしたのか、はつきり知らないが―アンダーソンは、夕食、トランプのペーシエンス遊び、就眠のために、金獅子ホテルへ帰った。

自分の部屋へ行く途中、彼はふと、このホテルから第十三号室を取り除くよう、旅館の主人に話すのを忘れていたことを思い出した。だがまた、それを話す前に、第十三号室が実際あったということを、一応たしかめて置こうと思った。

この決心は実行上どうさもなかった。その番号の部屋は、まさに明白にそこにあつたし、やるべき仕事は、つまりその中へはいつて行けばいいのだった。というのは、彼が今またドアに近か寄つた時、そのうちらで、足音と声を聞いたからである。

番号をたしかめるため、彼が佇んだ二三秒の間、うちの足音はやんだ。どうやらドアのついそばらしい。そしてなにかいかにも激昂している人物のような、せわしげなシュツシュツという呼吸を耳にしたので、びっくりした。で、自分の部屋へはいったが、部屋の大きさがまた、この部屋を選定した時よりも、ずっと小さくなっているので驚いた。これはちよつと、ほんのちよつと失望すべきことだった。もしほんとうに大きくないのだとわかれば、わけなく部屋をとりかえてもらうことができるのだった。ちよつどこの時、彼はなにか―私の記憶している限りでは、ハンカチだったと思う―を、旅行鞆から出したいと思った。その鞆は運搬夫が、置くにも事をかえて、ベッドからもつとも遠い、部屋のむこうの壁に立てかけてある足台の上へ、置いて行ったのだった。ところが、実にへんな事には、鞆は見えなかった。それはおせっかいな下男が、取りのけて、きつと中身なかみを衣装箆筒へ入れ

たのらしかつた。だが、なんにも衣装箆笥にはなかつた。これには困った。泥棒だという考えを、彼はすぐ棄てた。そんなことは、デนมマ―クでは、めつたにないことだつた。だが、ちよつとした間抜けは、たしかに行われることはあつた（それは珍らしいことではない）。そして「間抜け者」はきびしく戒められなければならない。しかし、彼の欲したものがなんだつたにしろ、それは、彼の氣慰みからいつて、朝まで待ちきれないほど必要なものではなかつた。だから彼は落ついで、ベルを鳴らし下男たちを騒がそうとはしなかつた。彼は窓―右手の窓―へ行き、静かな往来をのぞき出した。そこに向う側に、だだつびろい平塀をもつた、丈高い建物があつた。人つこ一人通らない。暗い夜。見るに足るものはなにもない。

灯火を背にしていたので、彼の影は向うの塀に、はつきり映つた。また、左のほうには、第十一号室にいる、髭のある客の影もはつきり

映った。袖付きシャツを着て、一二度行きつ戻りつし、そしてまず髪にブラシをかけ、やがて寝間着と着かえた。

するとまた、第十三号室の客の影が右のほうに映った。これは更に興味あるものだった。十三号客は、アンダーソンのように窓闕に肱をかけ、往来をのぞき出していた。背の高い痩せた男のように思われた――あるいは、もしかすると女かな？――すくなくとも、それは、ある種の布ぎれで頭部を包んでいる何者かで、ベッドへ行く前に、赤い笠をかけたランプを持って戻り、そのランプはひどく揺れているにちがいないらしかった。向うの塀の上には、鬱陶しげな赤い光が、上下にはつきり動いていた。アンダーソンは、もっとその人物を知りたいと思つて、すこし首を伸ばした。だが、窓闕の上の、ある軽い、なんだか白い布地の襞のほかには、なにも見ることはできなかつた。

そこへ、往来で、遠くから一つの足音がした。それが近かづいて来

たのは、十三号室に、外からまる見えだということ、さとらせるためだったらしい。十三号室の人物は、窓から突然パツと離れた。そして赤い光は消えた。アンダーソンは、巻煙草をふかしていたのだが、吸殻を窓闕に置いて、ベッドへ行つた。

翌朝アンダーソンは、湯やその他を持って来た「間抜け者」に起きた。目をあけた彼は、正しいデンマーク語を考え考え、できるだけわかるように言った。

『おい。お前は私の鞆を動かさちやいかんよ。どこへやったのだい？』
こんなことは珍しいことではないというように、その「間抜け者」――女中は笑つた。そしてろくろく返事もしないで出て行つた。

アンダーソンは、むしろ怒つて、ベッドに身を起し、女中を呼びかえそうとした。が、彼はまっすぐ前方へ目を見はつたまま動かなかつた。そこに、鞆は、彼がはじめ到着した時、運搬夫が置いたと、全く

同じ場所の足台の上に、のっかっているのだった。これは注意力の精確さを誇る人間にとっては、とんでもない衝撃シヨックだった。どうしてこの鞆がまあ、昨夜、ここから逃げ出したのか？彼はわかるような顔はしなかった。しかし、とにかく、今、鞆はそこにあるのだった。

ところで日光は、鞆のありか以上のものをあきらかにした。それはこの三つの窓をもつ部屋のほんとうの恰好を示してくれたことで、昨夜妙に狭いと思われたのが今朝はそうでなく、アンダーソンは、やっぱりこの部屋を選んでよかったと満足した。ざつと着物を着かえた時、彼は天気工合を見ようと、まん中の窓からのぞき出した。すると、またギョツとすることに出くわした。昨夜はよっぼどぼやぼやしていたにちがいない。だが、ベッドへはいる前に、たしかに右側の窓で喫煙したことは、十遍の上も誓っていい。ところが、今見ると、吸殻はまん中の窓の闕に置かれているではないか。

彼は朝食のために下へ降りて行こうとした。すこし寝過ぎていた。だが、十三号室は、もつと寝過ぎていた。そのドアの前にはまだ編上げ靴が置かれていた。―紳士の靴だった。だから十三号室の人物は男だった。女ではなかった。その時彼はドアの上の番号を見た。それは第十四号室だった。ではうっかり十三号室を、通り過ぎたにちがいないと思った。十二時間のうちに三度も間抜けた間違いをするなんてことは、規則正しい、心こまかな人間にとっては、あまり数が多すぎた。そこで確かめるために振り返った。十四号室の次の部屋は、彼の部屋の十二号室だった。第十三号室なんて、結局ありはしないのだった。五六分間、この一昼夜に経験したいろんなことを、よくよく考え直してみたが、アンダーソンは、この問題を打ち切ることにした。もし彼の視覚なり頭脳なりが、まさっていたら、彼はこの事実を探り出す多くの機会を持った筈である。そうでないにしても、きつと非常に興

味ある経験をした筈である。いずれにしても事件の発展は、たしかに注目に価いした筈である。

その一日中、彼は、前に言ったあの僧正の書翰を研究しつづけた。残念なことには、書翰は不完全だった。ただ一通だけは、ニコラス・フランケン博士の事件に関係しているものであることがわかった。それはヨエルゲン・フリース僧正から、ラスムス・ニールゼンに宛てたものだった。こんな文句があった。――

『われ等は、法廷に於ける貴下の裁断に対し、承服するの心、いささかもこれなく、且つそのため必要に應じては、断乎貴下に抗議すべき存念に候いしも、わが信実にして愛すべきニコラス・フランケン博士は、まさに貴下の錯誤にして悪意ある嫌疑を敢てせられたるにより、突然われ等より除去せられ申候。こはあきらかに末法濁世の問題たるべく候。而も貴下が更に進んで、使徒にして大伝道者たる聖ヨハネが、

その至高なる黙示録に於て、神聖羅馬教会を「誹衣の婦人」「すなわち邪教」の姿にて叙述せりと主張せられ候こと、よくこの間の消息を伝えたりと存ぜられ候。』云々。

ずいぶん穿鑿したのだが、アンダーソンは、この書翰の続きを発見できなかったし、また開戦理由ケイサス・ベライの「除去」の原因や方法について、なんの手がかりも発見できなかった。彼はただフランケンが、突然死去したのだと想像し得ただけだった。すなわち、ニールゼンの最後の書翰の日附―その時は、たしかにまだフランケンフランケンは生存していた―と、僧正の書翰の日附の間には、二日の差しかないのでフランケンの死は、まったく不慮のものでなければならなかったのである。

午後、アンダーソンは、ちよつとハルド町へ出かけた。そしてベツケルンド街でお茶を飲んだ。知性の点でいささか神経質にはなっていたのだが、彼は今朝恐怖に追いやられた経験のような、視覚や頭脳の

失敗の或る徴候があつたことに、気がつかなくつた。

夕食の時、彼は旅館の主人のそばへ行つた。なにかさり気ない話をしたあと、彼は訊いた。『このデンマークへ来ると、大抵のホテルで、十三号という部屋番号がはぶかれています。いつたいどういふわけですかね？このホテルにもないようですが。』

主人はおもしろげにうなずいて、『そんなことをお考えなさるとは、あなたもそんなことにお気づきなんですな。私もそのわけを知ろうと思つて、自分で一二度考えたことがありました。そして言いました。教育をうけた人間には、こうした迷信的な觀念には用がないつてね。私はこのヴァイボルグの高等学校で学びました。私達の老先生は、いつも、こうした種類の事には一切顔をそむけるお方でした。先生は、もう大分以前になくなられました。——立派な毅然たる人物で、頭脳ともにも手もすばやく働くのでした。その少年時代を思い出しますよ。あ

『で、あなたがこの家へ来られた時、第十三号室なんて部屋はあったのですか？』

『いや。それをお話ししようとしているんですよ。御存じのように、こうした旅館で、普通受け入れるお客さんは、商人階級―旅商人階級なんです。そうしたお客さんたちを、十三号室に入れたらどうでしょう？お客さんは即刻、でなくともそのうちに街路へ出て寝るでしょう。私個人としては、部屋の番号なんて、まるで問題じゃないのです。だからよくそうお客さんたちに言ったのです。だが、お客さんは、その番号にこだわるのです。その番号の部屋は縁喜が悪いというんです。十三号室に泊って、そして二度とふたたび、そんな部屋には泊ろうとしなかったお客さんの間には、いろんな話があるんです。大事な得意先を失うとか、なんとかかとかね。』と、主人は、なお写生的な言いぶりを考えながら言った。

『じゃあ、あなたのうちでは、第十三号室をなんのために使っているのですか?』と、アンダーソンは訊いたが、問題の重点とは、まるでちぐはぐに、妙な気がかりな言葉を口にしたものだ、自分でそう思った。

『うちの十三号室ですって?へえ、私はこの家には、そんなものはありません、申しあげてるじゃありませんか。私はあなたがそのことを、認めてくださったと考えていましたが……もし、その部屋があったとしたら、あなたのお部屋のつぎになっているはずですがね。』

『ええ、そうです。ただ、今ふっと考えたことなんですが、——つまり私は、昨夜、その番号の部屋を、あの廊下で見かけたと思うんです。ええ、実際、まったくまちがいでなくね。というのは、一昨夜も、同じくその番号の部屋を見たのですからね。』

無論、主人のクリステンゼン氏は、アンダーソンが予期したように、

この意見を軽蔑するように笑った。彼は、このホテルに、第十三番室は決してないし、彼が引き移る前にもなかったという事実を、あまたたび繰りかえして強調した。

主人の確言によつて、アンダーソンは幾分安心したものの、まだ迷った。で、彼は、果して自分が錯覚のとりこになったのかどうか、それはともかく、主人を、その晩おそく、自分の部屋へ喫煙においでなさいと招くが最上の方法だと考えるようになった。ちようど持っていたイギリスの町々の写真が、招くにいい言い訳となった。クリステンゼン氏は、うまく籠絡に乗った。非常によろこんで招きを承知した。十時頃参りましようと言ったので、アンダーソンは、その前に数通書かねばならぬ手紙があつたため、一応部屋へ戻った。こう白状することは、いかにも恥かしいが、彼は、第十三号室の存在問題について、まったく神経質になつていたことは、打消し得ざる事実であつた。そ

の極彼は、第十三号室の前を、第十三号室のドアのあるべき場所を、通りぬけたくないために、第十一号室の方を過ぎるようにして、第十二号室なる自分の部屋へ行った位이었다。

部屋へはいるなり、彼はすばやく、念入りにあたりを見まわした。そこには部屋がいつもより小さくなって見えるという、あの解釈し難い感じのほかは、彼の疑懼を証するに足るなものもなかった。また今夜は、例の旅行鞆の有無に関する問題もなかった。というのは、鞆の中のものをすっかり取り出して、空鞆をベッドの下へ押し込んで置いたからだだった。努力して彼は、心の中から、第十三号室という懸念を追い出した。そして手紙を書くため椅子によった。

隣室は、まったくシンとしていた。時にドアが廊下の方へ開かれて、編上げ靴が投げ出されたり、客の旅商人がなにか口の中で鼻歌をうなりながらあるいた。そとでは、おりおり荷馬車が、ひどい石ころ道を

ガタガタと通って行ったり、敷石の上をせわしげにあるく人の足音がしていた。

アンダーソンは手紙を書きおえて、ウイスキー・ソーダを注文した。それから、窓へ行って、向うの平塀とその上に映る影を研究した。

彼が気に留めている限りでは、第十四号室は、弁護士が占領していた。食堂でもほとんど口をきかず、いつも皿のわきに小束こたばの書類を置いて、それに読み入っている、落ちついた男だった。だが、ひとりになると、あきらかに獣性を発する習慣らしかった。でなければ、どうしてあんなに踊れよう？隣室からの影は、たしかにそうであることを示していた。なん度となく彼の細いからだは窓を横切り、両腕は打ち振られ、痩せた足は驚くべき素早やさで蹴あげられた。彼ははだしらしかった。そして床板ゆかはよく敷かれている筈だった。なぜなら、あんなに飛びまわるのに音一つしないからである。ホテルの寢室で、夜も

十時になっているのに踊り狂っている、この弁護士アンデルス・イエ
ンゼン氏は、なにか堂々たる歴史画の好題目のように見えた。アンダ
ーソンは、あの「ウドルフオの神秘」のエミリー「イギリスの女流小
説家アン・ラードクリッフが一七九四年に発表した怪奇小説。アペナ
インの中世古城に起った妖魔の行動を描叙したもので、イギリスの少
女エミリーがその犠牲的主人公。」を思い出した。そしてこの不可思
議を次の行ウツキようにもじり直した。

われの旅籠はたごにもどりしは、

夜も十時におよびたり、

給仕等思うわれ病むと、

そを気にかくるわれならず。

されど部屋の扉閉とじし時、

わが深靴をそとに置き、
踊り出でたり夜もすがら。

たとえ隣客そしるとも、
踊りつづけめ更になお、
われ法律に馴染む身ぞ、
そしらばもしれなんのその、
彼等が抗議愚弄せん。

もし旅館の主人が、この時ドアをノックしなかつたら、おそらくべらぼうな長詩篇を、読者に提供し得たかも知れない。

部屋のはいつて来た時の、愕然とした顔色から判断して、クリステンゼン氏も、アンダーソンが撃たれたように、部屋の中のなにか異常

な様子に、ハッと撃たれたらしかつた。だが彼は、なにも言わなかつた。アンダーソンが見せた写真は、彼を大いに興がらせた。そして彼はまた、いろんな自伝的な話題をもち出した。そんなことで、もしこの時、あの隣りの弁護士が、唄いはじめなかつたら——むやみに酔っぱらっているか、それとも気が狂っているかというよりほかには考えられないやり方で、唄いはじめなかつたら——会話の筋を、目的の第十三号室に転ずることができたかどうかは、わからないところだつた。

ふたりが耳にしたのは、高い細い声だつた。そして長い間使つたことのないような、乾^ひからびた声のように思われた。それは言葉であり調子であることには、疑いもなかつた。唄は、びっくりするほど甲高くなるかと思うと、たちまち低く、まるでがらんだの煙突にこもる冬風か、空篋のこわれたオルガンかといったように、絶望的な呻きになつた。それは実際おそろしい響きだつた。もし自分一人がここにいた

ら、きつとちかくの旅商人の部屋へ、助けってくれと逃げ込んだにちがいないと、アンダーソンは思った。

旅館の主人は、ポカンと口をあけたまま腰かけていた。

『なんか知ら？』と、彼は額の冷汗を拭きながら、やっと口を切った。『恐ろしい！いつだか一度あれを聞いたことがあります。だが、私は猫の仕業だと信じていたんです。』

『気が狂っているんだな？』と、アンダーソンは言った。

『きつとそうです。まあ、お気の毒な！あんないいお客さんで……噂によると、家業には大変成功した人で、そして、育てあげるべきお子供さんもあるとのこと……』

ちようどその時、たまらないようなノックがドアにしたかと思うと、そのノックした人は、許しも待ちきれない風で、飛び込んで来た。それはあの弁護士だった。――ふだん着のまま、ひどく髪を振りみだし

て、そしていかにも憤然とした様子で。

『ごめんなさい。』と、彼は言った。『どうか、おやめくだされば、まことにありがたいのですがー』

ここまで言いかけて、彼は唾を呑んだ。というのは、前にいる二人が二人とも、騒ぎの責任者でないことが、あきらかだったから。ところが、ちよつとやんだ騒音は、また一層あらあらしく増大した。

『だが、いったいまあこれは、どういうわけなんです？』と、弁護士はカツとなった。『どこだ？誰だ？私は気が変になっているのかな？』

『そうですよ、イエンゼンさん。あの声は、隣りのあなたのお部屋からではないですか？猫か、それとも煙突の中に、なにか詰っているのじゃないですか？』

これはアンダーソンが、言おうと思いついた最上の言葉だった。そ

してそう言った時、その言葉は無駄だとわかった。あの恐ろしい声を聞き続けることは、とてもたまったものでなかった。彼は、椅子につかまって冷汗びっしよりに震えている、旅館の主人の、茫漠たる蒼白い顔を見やった。

『猫や煙突に、なにができるもんですか。』と、弁護士は言った。『できませんとも。しかも私の部屋には煙突なんてないのです。私はあの声が、ここから出るのだと合点して、ここへ来たのでした。あの声はてつきり、私の部屋の次の部屋ですよ。』

『あなたの部屋と私の部屋の間には、部屋なんて、ないじゃありませんか。』と、アンダーソンは熱心に言った。

『ええ、そうです。』と、イエンゼン氏はむしろ鋭く、『すくなくとも、今朝はなかったです。』

『ああ！じゃあ、今晚だって、ないはずです。』

『どうも変だ。』と、弁護士は、ためらい勝ちに言った。

突然、隣りの叫び声、唄い声が、バツタリやんだ。そして唄い手は、ひとり低くうめき笑いするようにみえた。この響きには、三人とも、しんそこ震えあがった。ーと、あたりは静まりかえった。

『ねえ、クリステンゼンさん。』と、弁護士は言った。『なんか話がありますか？これはどうしたわけですか？』

『とんでもない！』と、クリステンゼンは言った。『どうして話なんか！私だってあなたがた以上に、なにも存じませんよ。どうぞ二度とふたたび、あんな声を聞くことはありませんように。』

『私だって。』と、イエンゼンは言った。そして吐息の中になに「と」か混じえた。はっきりしないが、アンダーソンには、そのなに「と」かが、聖書の詩篇の中の、最後の言葉“*omnis spiritus laudet Dominum.*”（なんじ等エホバをほめたたえよ）であるように思えた。

『しかし、この三人で、なにかしなくちやいけませんね。』と、アンダーソンは言った。『隣の部屋へ行って、調べてみようじゃありませんか？』

『でも、あれはイエンゼンさんのお部屋ですよ。』と、主人は咽ぶように言った。『行ったところでもうありません。イエンゼンさんは、あそこからここへ来られたんですもの。』

『いや、私だって、べつに確かじゃないのです。』と、イエンゼンは言った。『このお方のお言葉が正しいと思う。われわれは行って見なくちやなりません。』

即刻集めることのできた防禦の武器といえば、一本のステッキと一本の蝙蝠傘だけだった。三人の冒険隊は、ゾクゾクしながらも、廊下へ出た。そとは恐ろしくシーンとしていた。一つの灯火あかりが次のドアの下から漏れていた。アンダーソンとイエンゼンは、ドアに近か寄った。

イエンゼンがその把手をひねった。そしてグツと強く押した。駄目。ドアはびくともしなかった。

『クリステンゼンさん。ここに一番力のある下男をつれて来てくださらんか。われわれは、はいつて調べなけりやならん。』と、イエンゼンが言った。

この現場からのがれられるのをよろこんで、主人はうなずくなり、急ぎ去った。イエンゼンとアンダーソンが、ドアを見ながら、そとに残った。

『ごらん。この部屋は、第十三号室ですぜ。』アンダーソンが言った。『うむ、そうです。あちらがあなたの部屋のドアで、あちらが私の部屋のドアだ。』イエンゼンが言った。

『私の部屋は、昼間は三つ窓を持っていますよ。』と、アンダーソンは、神経的な笑いを、どうにか押し鎮めて言った。

『冗談じゃない。私の部屋だってその通りでさあ！』と、弁護士は、振りかえりながら言った。

彼の背は、今、ドアに触れた。ーと！その瞬間、ギイツとドアが開き、一本の腕が、うちらから伸びて、彼の肩を爪でひっ搔いた。腕はぼろの黄ばんだリンネルを着けており、見えるだけの皮膚には、長い灰色の毛が生えていた。

アンダーソンは、嫌悪と恐怖の叫びをあげて、突嗟にイエンゼンを、その腕の届かぬところまで引き戻した。するとドアはギイツと締まり、低い薄笑いが聞えた。

イエンゼンはなにも見なかったのだが、アンダーソンが急いで、彼がどんな危険を冒かしたかを話すと、彼は非常な激動状態に陥り、この計画を中止して、彼等の部屋のどちらかに閉じ籠もろうと言い出した。

だが、彼がこの考えを言っていた時に、旅館の主人と、二人の屈強な男がやって来た。

みな慎重な警戒するような面持だった。イエンゼンは、彼等に早口で事の詳細を説明した。が、それで彼等は戦う勇気をたちまち失ってしまった。

二人の男は、持っていた鉄挺かねてこをバツタリ落した。そして躊躇なく、こんな悪魔の巣窟へ、いのちがけの危険を冒かして飛び込む気はないと言った。旅館の主人は、みじめにも、いらいらおろおろしていた。それはもし危険に刃向って行かないことになれば、ホテルは破滅するばかりだし、といって彼は到底自分で刃向うなんて気にはなれなかったからだ。幸いにもアンダーソンは、このへたばたった気力の活路を発見した。

彼は言った。『これが随分評判の、デンマーク人の勇気なのかね？』

ここに居るのは、ドイツ人一人じゃない筈だ。そうだとしたら、敵一人にわれわれは五人の筈だ。』

二人の下男とイエンゼンは、この言葉に刺戟されて奮い起った。猛然とドアへ突進した。

『待て！』アンダーソンは言った。『あわてちやいけない。御亭主、あなたは灯火あかりを持って、そとにお立ちなさい。そして君たち二人の誰か、ドアをぶちこわすのだ。ドアが潰れても中へ飛び込んじやいけないよ。』

下男二人はうなずいた。若い方が足を踏み出し、鉄挺かなてこを振りあげた。上の鏡板めがけて力まかせの一撃を加えた。ちつとも予想通りの結果にならなかつた。木は裂けも砕けもしなかつた。ただ頑丈な壁でも撃つたように、にぶい音をたてただけだつた。若者はアツとひと声叫んで、鉄挺を取り落した。そして肱をさすつた。一瞬みな眼は若者に

向けられたが、つづいてアンダーソンが再びドアへ振りかえると、ドアは消え失せていた。―鉄挺のかなりな深傷を受けた廊下の漆喰壁が、じつと彼の前に立ちはだかっているのだった。第十三号室の姿は、なくなっているのだった！

しばらくは皆、まったく無言のまま、白壁を凝視するばかり。―階下の庭から一番鶏の鳴くのが聞かれた。アンダーソンは、その方へチラと眼をやったが、長い廊下の端の窓越しに、東の空が薄蒼くあけてゆくのが見えた。

*

『まあ。』と、旅館の主人は、口籠るように言った。『あなた方は、今夜はほかのお部屋へお泊りがいいでしょう。―ダブル・ベッドのあるね。』

イエンゼンにしてもアンダーソンにしても、この忠告に反対ではな

かった。彼等は、ああした経験をした上では、二人いっしょで部屋を探がそうという気持ちになっていた。二人はその晩入用な物を集めるため部屋へはいった時も、おたがいに連れ立って、一人は灯火あかりをもつ役をするという工合だった。彼等は、彼等の部屋である第十二号室と第十四号室には、窓が三つあることを確認したのだった。

つぎの朝、同じ連中は、再び第十二号室に集まった。旅館の主人は、当然、外部の助力を乞うことを避けたがっていたが、そうは言っても、この家のあの部分の不可思議は、一掃しなければならなかった。そこで、あの二人の下男に、大工の仕事をやらせることにした。作り直しもできない位いに沢山の厚板をこわして家具は取りのけられ、第十四号室にもっとも近接している、あの部分の床ゆかが剥がされた。

読者は、この話の筋から当然、ここで一箇の骸骨が発見されて――

その骸骨があのにコラス・フランケン博士のであると想像するだろう。ところがそうでなかった。床板をささえている梁の間から彼等が発見したものは、銅の小函だった。その中から、きれいにたたまれた犢皮紙ウエラムの記録があらわれた。二十行ばかりなにか書かれている。アンダーソンもイエンゼンも（彼が古文書学者のなにかであることがわかったが）、この発見にはいたく興奮した。これはあの異常な現象に解決の鍵を与えるものと思われた。

*

私は、読んだことのない、占星学上の著述の写本を所蔵している。この写本の口絵の一つに、ハンス・ゼーバルド・ベーハム（一五〇〇年代のドイツの版画家。聖書や年代記の版画の傑作がある。）の木版画がある。多くの賢人哲人が、卓を囲んで坐している画である。このディテールは、鑑定家に、原本と一致していることを証明せしむるに

足るものである。私はその書名を思い出せないし、今は思い出すべき
よすがもない。だがその飛頁フライ・リーヴス「本の前後にある白紙」にはいっばいな
にか書き入れてある。十年も私はこの本を所蔵しているのだが、読む
べき方法を決定し得ないし、いわんやそれがどこの国語であるかも決
定し得ない。銅の小函にあった記録を、時間をかけて研究した後の、
アンダーソンとイエンゼンの境界は、こうした私の境界に似ないでも
なかった。

二日間考えぬいた結果、イエンゼンは、二人のうちでは大胆なので、
この国語は、ラテン語か古代デンマーク語かのどっちかだと、冒険的
な推測を下した。

アンダーソンは、敢えて推測を加えるようなことはしなかった。そ
して、進んで、函と記録は、博物館に陳列するため、ヴァイボルグの
史学会へ引き渡すべきだとした。

私は、この二三ヶ月前、甥のアンダーソンから聞いたのである。それは二人でウプサラの図書館を訪ねた時で、近くの森の中に腰をおろし、われわれが―いや、むしろ私が―悪魔に身を売る約束をしたというダニエル・サルテナアス（晩年ケーニヒスベルグ大学で、ヘブリュウ語の教授だった人物）の事蹟を、笑った時だった。アンダーソンは、事実、愉快ではないようだった。

『若き愚か者！』と、彼は言った。この言葉は、サルテナアスを指したもので、彼がその無分別を行ったのは、ほんの卒業前の学生にすぎなかったのだ。『いったい、あの人は、自分が機嫌をとろうとしている仲間が、どんな仲間なのか、わかりそうなものなのに！』

そこで私は、これに対して紋切型の考えを言ったのだが、彼は不平らしく鼻を鳴らした。その午後、彼は、ここに読者諸君が読まれたよいうな話を、聞かしてくれたのだった。だが、アンダーソンは、この話

からいかなる推論をもくだされることを拒み、また、私が彼に対して
くだしたいかなる推論にも、同意することを拒んだのであった。